校長室だより～燦燦～ №１６４

会う

2020.7.30

We will meet again.（私たちは再び会います）今年の４月に、英国のエリザベス女王が、ロックダウン中の英国の人々に向けて行ったスピーチの最後に言った言葉である。これは、第二次世界大戦中に英国で大流行したヴェラ・リンの歌、「We'll Meet Again」をもじったものだそうである。英国では、この言葉に泣かされた人が大勢いたらしい。

ここで、少し考えてみる。英国の人たちはロックダウン中も親族や友人、同僚に会っていたはずである。オンラインで話したり、会議をしたりして日常的に接触していたにちがいない。

ある雑誌で、カナダ在住の作家の西加奈子さんが、こんなことを言っていた。「ネットで人類学者の記事を読んだんですけど、他者への信頼は、視覚と聴覚だけじゃなくて、嗅覚とか味覚とか触覚とかの感覚も使って築くものらしいです。だから、ネットで話していることと実際に会うことはイコールではないみたいなんです」

関連して、京都大学総長の山極壽一先生が、こんなことを言っている。人間は、視覚と聴覚を使って他者と会話すると脳で「つながった」と錯覚するらしいが、それだけでは信頼関係までは担保できないという。なぜなら人は、五感のすべてを使って他者を信頼するようになる生き物だからである。そのとき、鍵になるのが、嗅覚や味覚、触覚といった、本来「共有できない感覚」だという。他者の匂い、一緒に食べる食事の味、触れる肌の感覚。こうしたものが他者との関係を築く上で重要なのだそうだ。

つまり、人間はまだ身体的なつながりのほうを信じているとも言える。そのうち脳のつながりだけで幸福を感じる人も出てくるかもしれないと山極先生は言っている。まだ今のところは、人間は他者の身体を必要としているらしい。

もう１０年以上も前になるが、中学校の教頭をしていたときに、オンラインでの会議を何度も経験した。今思えば、だいぶ先進的な取組だったようである。会議に参加するメンバーとは、何度か顔を合わせている。実際に「会っている」のである。正確には、「会う」とオンラインを併用していたということになる。これが、一度も会うこともなく、オンラインだけでのつながりであったならどうだったであろうか。かなり浅薄な関係になっていたように思う。

大学１年生の私の娘は、５月からずっとオンラインでの授業を続けている。パソコンの画面上で顔も名前もわかっている人もいるが、一度も会ったことがない人が多い。まさしくオンライン上でのつながりである。これが後期も続くとのこと。

オンラインでの「つながり」は「会う」こととは違う。それを本能的に知っているから、英国の人々も女王のスピーチの言葉に涙したのだろう。どんなにテクノロジーが発達しても、いまだに人を幸福にするのは、「会う」よろこびなのである。

娘を含めて日本中の大学生が、キャンパスを中心に様々な人と「会う」ことで、互いに刺激し合い、成長できる本来の姿が戻ってくることを願うばかりである。